

書評

大江 透 著

不整脈

ベッドサイド診断から非薬物治療まで

関東中央病院名誉院長

杉 本 恒 明

立派な装幀の不整脈教科書である。大江透教授がお一人で書かれている。評者も実はかねて、こうした本を書きたいという願いはもっていた。しかし、いざ書くとなると、不得手な分野が目につき、それぞれの専門家に依頼するのが妥当と思われて、結局は分担執筆になってしまっていた。それを大江教授はお一人でおやりになった。大江教授でなくては書くことができなかった教科書であり、また、このような本の執筆者としてもっとも適切な人は大江教授であるとは誰もが認めるところであろう。

大江教授は国立循環器病センターという臨床研究の場に長くあって、後に岡山大学内科教室という教育研究の場に移られた。この間にご自身もたれた経験が本書執筆の動機となったもののように思われる。

不整脈の予後が健康な集団にみ

られた場合と末期患者にみられる場合とでは異なることを400年も昔の医学がすでに教えているということから本書は始まる。不整脈の分類には、心電図上の分類、原因・経過上の分類、電気生理学的検査による分類、発生機序による分類、有効薬剤による分類、日内変動による分類などと独自の分類がある。基礎的知識の解説がこれに続いて、次が検査である。基礎疾患の検索は本書ならではの章といえよう。診断は日常的な問診、身体所見、心電図によって行われる。この章ではティルト試験、圧反射感受性検査にもふれられている。ついで、電気生理学的検査である。電気生理学的検査は不整脈の機転を明確にし、診療に役立つ多くの知見を提供してきた。治療には薬物治療、デバイス治療、外科的治療、アブレーション、そして、さらに大規模臨床試験の成績が整理された問題点に私見を併せ

て紹介されている。各論では不整脈の種類別にこれらの知見が再度、まとめられていて、わかりやすい。ことに頻拍における興奮回路の同定、アブレーション部位の決定などについては流石に説得力がある。心室頻拍、心室細動が先にあって、これに心室期外収縮が続くのは、その意義を考えると理解しやすい。

本書に一貫しているのは、つねに臨床医としての視線があるということである。すべてが臨床的有用性によって評価されている。治療に役立つか、予後を改善するか、が評価の基準にある。アブレーション成功率別の不整脈の分類などはこの意味での独自の工夫であろう。

実にコンパクトによくまとめられている。単独執筆のよさであろう。また、大江教授の学識の深さを感じさせる。文章的には、独特の調子を帯びた表現もあって、講義風景が想像される。そして、このような大江教授の名講義が岡山大学の学生諸氏から、広くわれわれにも開放されたことを嬉しく思った。

〔B5 頁536 2007年 定価
8,925円(本体8,500円+税5%) 医学書院刊〕